

2014年度京都造形芸術大学入学式 式辞

2014年4月3日（木曜日）

尾池和夫

京都造形芸術大学芸術学部に入学者の843名の皆さん、京都造形芸術大学大学院芸術研究科修士課程に入学者の75名の皆さん、博士課程に入られた5名の皆さん、入学おめでとうございます。列席の瓜生山学園の役員、副学長、学部長、研究科長、その他のすべての教職員とともに、皆さんの入学を、心からお祝い申し上げます。

今年入学された方々は、日本の各地から、韓国から、あるいは中国の大陸や台湾の各地から、また、オーストラリア、インドネシア、ギリシャ、タイ、カナダから、この京都、瓜生山にある京都造形芸術大学で自らの人生を設計する学習の場として選んで見事に入学された方たちです。

この日まで、皆さんはそれぞれに、18年以上の人生を経験して来ました。それをしっかりと支えてくださったご家族とともに、これまでの道を振り返ってみてください。ご家族の皆さまも、大学生となられたご子弟の姿をあらためて見つめておられます。独立して自らの道に踏み出した人として、しっかりと見守ってあげてほしいと思います。

皆さんが入学したこの瓜生山学園には、大学の他にも、こども芸術大学という幼児教育の場所があり、京都芸術デザイン専門学校があり、京都文化日本語学校があります。また、山形市には姉妹大学の東北芸術工科大学があります。それらに所属する人たちが、学園の中で相互に交流し、施設を共有しながら、協力して学習を深めていくことになります。

去る3月15日、2013年度の学位授与が行われました。学部に入学者の方々には、ぜひ動画サイト、**YouTube** でその式典の様子を見てほしいと思います。そして4年後に学士の学位を受ける自分の姿を思い浮かべてください。そのときどのような卒業作品を展示しているか、どのような職業に就職が決まっているか、何を目ざして社会に出ようとしているか、ご自分の近未来の姿を描きながら、これから学習を深めていってほしいと思います。

皆さんが過ごす学園の人びとを少しだけ紹介しましょう。

まず、今日、皆さんが歌った「59段の架け橋」という学園歌のことです。これは、2007年から2013年まで、本学の副学長であった秋元康さんが、この大学の開学（1991年4月）から20年を記念して作詞した学園歌です。AKB48によって発表された歌を、今年の入学式では、本学の学生たちによる声で、新しく収録されたもので紹介しました。これはウェブサイトにも載せますから、ご家族の皆さまもぜひ歌ってみてください。

秋元康さんは、よくご存じのように高等学校の生徒の時から作詞に才能を発揮してきた方ですが、そのような方でも、経験豊かな人生の中で常に成功してきたとは言えないと語

っておられます。若い人たちに彼は、「人生は勝ち越しさえすればいいんだよ」と語ります。失敗してもほんの少しでも多く成功すればいいのだと、彼は、自らの経験から助言してくれるのです。そのためには、勝ち越しをするためには、やはり努力を惜しまないことが重要です。

今、皆さん歌ったように「何回もの遠回りをして、答えを見つければいい、やがて暮れなずむ空に、一番星を指差す」と言うのが秋元康さんからの、皆さんへのメッセージです。これから毎日、59段の大階段を登って、しっかりと足腰を鍛え、大いに迷い悩み、そして楽しみながら、自分だけの、自分のための、自分らしい人生を設計してください。

寺脇研さんは、映画評論家であり、本学芸術学部マンガ学科に所属する教授です。文部科学省在任中に初等中等教育政策を担当しておられ、在任時には、ゆとり教育の推進役でした。ゆとり教育は有馬朗人さんが中央教育審議会会長のときから提唱した考えです。この教育方針による初等中等教育を受けてこられた方たちが、今大人になって、例えばオリンピックなどでも目覚ましい活躍をして、しかもそのインタビューに見事な受け答えをすることで知られるようになりました。今日入学式を迎えた皆さんもその世代です。

今、ゆとり教育に対する評価が分かれています。批判に答えて、2011年度からの学習指導要領では、ゆとり教育でも詰め込み教育でもなく、「生きる力をはぐくむ教育」となりました。これは皆さんがこれから学習する本学の教育の基本に通じるものであります。私は、本学の理念に照らして、ゆとり教育世代の学生さんたちと接して来ましたが、自分の経験に基づく直感から、芸術系大学の学生として、ゆとり教育で育った人たちの中から、必ずすばらしい人材が育ってくると確信しています。皆さん方の受けて来た初等中等教育の特長を發揮して、大いにのびのびと活躍してほしいと思います。

秋山豊寛（とよひろ）さんは、ソビエト連邦第3級宇宙飛行士であり、本学芸術学部教授です。民間人で初めて商業宇宙飛行を利用して、ジャーナリストとして初めて宇宙空間から報道しました。ソユーズ TM-11 からの生中継で、東京からの呼びかけに、「これ、本番ですか?」というのが、かれの宇宙からの第一声でした。

皆さんの人生も、これからはいつも本番だと思って臨んでほしいと思います。芸術作品は展示されたときが本番ですが、それを展示したとき、その作品が世界の歴史に残り、作者にはその作品を生み出したプロセスが人生の宝として残ります。秋山さんの宇宙からの第一声は私たちの記憶に残っていますが、秋山さんご自身は、その言葉が発生されるまでの緻密な計画と、間際までの時間の経過の中で、もっとも放送人としてふさわしい第一声となったという、そのプロセスをしっかり記憶しておられます。

この大学は、さきほど、松平定知教授によって力強く読み上げられた「京都文藝復興」を基本理念としています。これは、目前に新しい世紀を迎えようとするとき、本学の創設

者である徳山詳直理事長が書いたものです。そこにあるごとく、芸術文化探求へのとどまることのない研鑽が、人類の未来を、希望あるものへ導くと私も信じて、この場所にいます。

また、59段の大階段を登った場所に『藝術立国之碑』が立っています。そこにある3行は、徳山詳直理事長の言葉です。

「宇宙の神秘に平伏せ 地球の偉大さに畏れを抱け 生きとし生ける命を愛し尊べ」

この言葉をよく読んで、その意味を考えながら、また、「京都文藝復興」の意味を考えながら、明日からの学園生活を、力一杯、楽しんでほしいと思います。そして、芸術の力で世界の平和の実現に貢献しようとする人材として学位を取得する日に向かって、制作と学習に励んでくださることを期待しつつ、私の式辞といたします。

入学式を迎えた皆さん、本当におめでとうございます。ありがとうございました。